

# 1. 評価結果概要表

作成日 平成 22年 3月 10日

## 【評価実施概要】

事業所番号	4071001194
法人名	有限会社 正和
事業所名	グループホーム 平尾宅老所
所在地 (電話番号)	福岡県福岡市中央区平尾1丁目10番6号 (電 話) 092-522-1121

評価機関名	SEO (株)福祉サービス評価機構		
所在地	福岡市博多区博多駅南4-2-10 南近代ビル5F		
訪問調査日	平成22年2月18日	評価確定日	平成 22年 3月 29 日

## 【情報提供票より】(22年11月31日事業所記入)

### (1) 組織概要

開設年月日	平成 16 年 6 月 1 日		
ユニット数	3 ユニット	利用定員数計	27 人
職員数	18 人	常勤	18 人, 非常勤 人, 常勤換算 4.5 人

### (2) 建物概要

建物形態	単独	(併設)
建物構造	鉄筋コンクリート	造り
	11 階建ての	1 階 ~ 3 階部分

### (3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	40,000~50,000 円	その他の経費(月額)	10,000 円
敷 金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有( 100,000 円) 無	有りの場合 償却の有無	無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1380		円

### (4) 利用者の概要( 1月31日現在)

利用者人数	27 名	男性	7 名	女性	20 名
要介護1	4 名	要介護2	7 名		
要介護3	9 名	要介護4	4 名		
要介護5	3 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 82.7 歳	最低	60 歳	最高	98 歳

### (5) 協力医療機関

協力医療機関名	南折立病院 もろおかクリニック 倉光病院 吉村内科 前田歯科クリニック
---------	-------------------------------------

## 【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

施設長が伝え続けてきた“できることはご自分で…”“ご利用者の気持ちは?”と言う視点も、着実に、職員の胸に刻まれてきた。平成21年、3つのユニットの特色を明確にし、各ユニットの再編成が行われた。勇気ある再編成であり、ご利用者のユニット移動や、職員の異動も行われた。施設長を中心に、個々の職員との報告連絡体制が取られてきたが、21年からは、各ユニットの管理者と職員が、直接、連絡報告体制を取るようになり、新規ご利用者のアセスメントも、管理者と職員が中心になって行うようになった。急な体制の変更でもあり、現場の戸惑いも否めないものがあったが、施設長からの教えを受け継ぎながら、1人1人が責任を持って、ユニットの運営と個々のご利用者に向き合う姿が見られ始めてきた。現場の課題に対しても、“自分たちで対策を検討し実践する”という1年であった。その“3つのユニット”を、ずっと見守り続けてきた社長と施設長は、この1年で、各管理者、職員全員が力を付けてきていると評価している。更に、ご利用者とご家族、地域の方々の大きな支えを頂いての日々であったことも痛感されており、今後更に、“共に生活し、支えあい、喜びを分かち合う家族のように”していきたいと考えられている。

## 【重点項目への取り組み状況】

重点項目	①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4) 前回の外部評価後、職員全員で意見交換が行われた。職員の入れ替わりもあり、“評価”の意義の理解が完全にはできていないが、各ユニットに“評価結果”を置いており、職員全員の意識付けは続けてきた。「新たなユニット組織の改革」「地域包括支援センターとの連携」「ご家族への報告方法の工夫」等、前向きな取り組みを続けてきている。 今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4) 各ユニット毎に職員個々で自己評価を行い、その後一つにまとめられた。一年間の振り返りを行ってきたが、“頑張ったところ”“更に取り組んでいきたいこと”の意見が職員から出された。ユニット改革の1年であったが、各ユニット個々に責任を持ち、職員が自主的に意見を言える環境になってきており、着実に質の向上に繋がってきている。
	②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6) 2カ月に1回開催している。ホームの行事報告に続き、3つのユニットの管理者から、それぞれのユニットの入居状況や課題等の報告が行われ、「町内で変わった事は…」ということで、町内会長や民生委員の方より、地域の情報が伝えられている。ホーム、地域のその時々課題を話し合いながら、お互いに協力できることを確認しあっている。21年10月から、金曜日に会議を開催することになり、地域包括支援センターの方にも参加頂けるようになった。センターでの活動内容も、情報として得られるようになっていく。
重点項目	③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部8, 9) 21年から、各ユニットの管理者と担当職員が中心になり、ご家族との意見交換を行っている。同年に開始された“連絡ノート”は、職員が、各ご利用者の暮らしぶりを記録しており、ご家族も楽しみにされている。ご家族との“交換日記”のような存在にもなっており、本音でお気持ちを書いて下さる方もおられる。行事等には、ご家族も参加して頂き、ご家族交流の場も作り、ご家族同士が会話ができる機会作りを心がけている。
重点項目	④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3) 運営推進会議の効果もあり、ご利用者のお誕生会に地域のボランティアの方が来て下さった。“あこがれのハワイ航路”などの曲をバックに、フラダンスを披露して下さった。町内会長、民生委員の方々の協力もあり、地域の方々との交流も増えており、ホームの玄関先のベンチは、変わらず、地域の方々の休憩場所として活用して頂いている。今後も引き続き、公民館活動の中のカルチャーサークルに、ご利用者と一緒に参加したいと言う希望があり、まずは職員が参加して、顔馴染みになれるような取り組みをしていく予定である。

## 2. 評価結果(詳細)

(  部分は重点項目です )

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	ご利用者と職員が話し合い、「共に生活し、支え合い、喜びを分かち合う家族のように」という理念を定めている。各ユニット毎の、年間目標も決めているが、“支え合う”という言葉の中には、地域活動なども含まれている。21年度から、更に、それぞれのユニットの個性を発揮しており、各ユニットの管理者と職員が結束し、理念の実践に努めてきた。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	21年から、各ユニットの管理者が中心になり、職員との意見交換を続けてきた。施設長から指導を受けてきた「ご利用者の気持ちは？」という視点も、職員に受け継がれている。各管理者も「自分の祖父母のように接してください」等と伝えており、各自で対応方法を振り返り、職員が自主的に考える姿が増えてきている。21年、“いりこ”“にこやか”“さざんか”という、各ユニットの名前をご利用者に決めて頂いており、その姿勢は、“共に生活し”という理念の実践にも通じている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	周囲はマンションが多い地域であるが、ホームの玄関先にベンチを置き、地域の方々に休憩場所として活用して頂いている。年に1回、ホーム便りを地域の方に回覧しており、ご利用者と一緒周辺のお掃除も続けている。地域の運動会等にも見学に行き、楽しんでいる。前回同様、公民館活動(カルチャーサークル)にも、ご利用者と一緒に参加したいと言う要望はあるが、まずは、職員が参加することで顔馴染みになり、少しずつ、ご利用者も参加できればと考えている。	○	21年度は、各ユニットの体制が変わったこともあり、ユニット内の体制作りを重視してきた。前回の自己評価同様、職員の多くが、“地域との交流”をもっと増やしていきたいと望んでいる。職員の体制を整えながら、もっと多く、ご利用者と一緒、清掃活動等に参加できればと考えている。今後も、運営推進会議等を通して、ご利用者と一緒に参加できる場の検討を続けていかれることを期待したい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	各ユニットの特色を明確にしたことで、個々のユニットに必要なケア内容や環境整備を職員全員で続けてきた。職員の入れ替わりもあり、思うように実施できなかった項目もあるが、職員個々に、この1年間の振り返りを行った。自己評価の段階では、“更なる取り組み”まで出なかった項目もあるが、外部評価のヒアリングの中では、それぞれの取り組みへの思いを聞くことができた。今後も引き続き、“外出支援”“地域との交流”等取り組みたいと考えておられる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催し、ご家族・町内会長・民生委員・地域包括支援センターの方々に参加頂いている。年々、回数を重ねる毎に、参加者の方々からの意見も活発に頂いている。前回と同様、“ご利用者の外出場所”を議題で提案すると、次々に地域の情報を教えて下さり、行事の時のために“ボランティア”の方を紹介して下さる等、ご利用者の立場に立った前向きな意見交換が続けられている。行事にも一緒に参加して下さっており、その時に、ご利用者との交流も行われている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	中央区の第3地域包括支援センターの方が、運営推進会議に参加して下さるようになり、交流は深まってきている。21年3月、地域包括支援センターが移転し、新しいセンターも訪問させて頂いた。区役所にも訪問し、行事へのお誘いなども行っている。		
7	10	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、地域福祉権利擁護事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、必要な人にはそれらを活用できるよう支援している	管理者や職員は、権利擁護に関する研修に参加し、正しい知識を習得してきた。制度を説明するための資料等もホーム内に備え付けており、玄関ホールにも張り出しをしている。必要時、ご家族等への制度の説明も行っている。	○	職員の制度への理解は深まってきているが、職員の入れ替わりもあったことから、今後も引き続き、全職員が研修に参加できる機会を作り、職員全員が、ご家族の方々に制度の説明ができるようにしたいと考えている。合わせて、施設長が、全ご家族に制度の説明をしていく予定にしている。
4. 理念を実践するための体制					
8	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	21年秋、家族会を開催し新体制の説明を行った。同年、ご家族と職員の“連絡ノート”も開始し、個別記録とは別に“日々のご様子”や“職員の気づき”を職員がノートに残すようになった。面会時にご家族に見て頂いており、お返事を書いて下さる方も多い。ノートでの報告と合わせて、各ユニットの管理者や担当職員が、健康状態等をお伝えしている。		
9	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	職員の入れ替わりもあり、ユニット編成にも伴い、21年秋の家族会で、全体説明会を開いた。その後、各ユニット毎に分かれ意見交換を行った。ご家族には、「何かご心配なことがありましたら、何でも言ってください」と伝えているが、感謝の気持ちを伝えて頂くことも多く、職員は有難く思っている。今後も、日々の面会時と合わせて、家族会や運営推進会議の場でも伝えて頂きたいと考えている。		
10	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	社長は、馴染みの関係の大切さを理解しており、原則、他系列施設等との異動は行わないようにしている。ここ数年、職員の体調等の理由もあり離職が続いた。社長も求人続けているが、残された職員全員で力を合わせて乗り越えてきている。ホーム内の笑顔も変わらず、職員も前向きに日々のケアを続けてきたが、前回同様、その間、ご利用者のお力が発揮され、職員を助けて下さる場面が多い。3つのユニット間の協力も強く、ご利用者同士の助け合いも深まり、大きな家族のようなホームになっている。	○	社長は、職員増員への努力を続けられている。勤務体制の改善やマニュアルの整備含めて、継続した対策が行われている。新人、現任含めて、職員の前向きな気持ちが今後も継続し、ケア目標が達成できるような人員が揃っていくことを期待していきたい。
5. 人材の育成と支援					
11	19	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	社長は面接時、職員の人柄を大切にすると共に、ホームでの仕事に向いているかどうかを見極めている。性別・年齢・宗教・出自等を理由に、最初から採用対象から外すということもしていない。施設長、各ユニットの管理者は、職員の自らの能力・得意なことを活かして日々動いて頂けるように配慮している。職員が生き生きと働けるよう、資格取得や研修のための勤務調整にも極力応じるようにしている。ご利用者と共通の趣味や特技がある職員を担当にするなど、ご利用者とのスムーズなコミュニケーションが図れる配慮も行われている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
12	20	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	社長と施設長は、常にご利用者の立場に立った視点で全体を統括されている。ホーム内では、各ユニットの管理者を中心に、人権尊重の大切さを職員に伝えている。人権に関する外部研修にも参加し、それを職員にも伝えている。何か議題が挙がる時にも、各管理者は、「ご利用者の気持ちは？」と職員に質問を投げかけ、常に、自分で考える力を身に付けてもらう取り組みを続けている。		
13	21	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社長、施設長は、職員の質の向上が重要と考えている。21年から、現場の職員育成の担当は、各ユニットの管理者が担ってきているが、ユニットの再編成と共に、職員の入れ替わりもあり、各ユニットの管理者間で検討を続けてきた。新人職員に指導者を付けたり、マニュアル作りにも取りかかるなど、対策を一つ一つ考えながら、1年歩んできた。ユニット内の報告体制を整えている段階で、職員間の連絡ミス等の課題も見られたが、次第に、新体制にも慣れてきている。	○	施設長は、一人一人の職員の立場・経験等に応じて、個別に研修計画を考えている。この1年の経験を通して、確実に職員個々の力は付いてきていると、施設長は評価されている。今後は、年度毎に、個々の管理者と職員の目標作成を行い、その取り組みを記録に残していくことで、職員の更なる意識向上にも繋がると考えられる。前回同様、「思い込みの仕事をしていないよう、今後も研修に参加したい」と職員は考えており、人員を整えながらも、更に研修の機会が増えていくことを期待していきたい。
14	22	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	社長は他の同業者との交流を勧めている。施設長も同業者との交流を希望しているが、参加費用等の課題もあり、現在は積極的な交流までには至っていない。また、他同業者との交流のためには、一人一人の職員が、他のホーム職員からの疑問や質問に答えられることが必要と考えてきたため、今までは、ホーム内の職員育成に力を注いできた。職員の成長を確認できてきたので、今後は、更に積極的に同業者との交流への取り組みをしていく予定である。	○	現在、他ホームで対応できないご利用者の相談等を受け、連携を図ってきている。前回同様、今後は更に、近くのホーム同士に声をかけ合い、直にお話をする機会を作っていくことから始めていく予定にしている。その後は、相互訪問や勉強会をしていく等、少しずつ交流ができていくことを期待していきたい。
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
<b>1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応</b>					
15	28	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	ご家族から、相談の連絡を頂くことが多い。ご本人が納得して入居されることを前提にしており、火の管理などができないことをご本人が自覚した頃を見計らい、ホームの存在を伝え、見学に来て頂くと言う段階を踏む場合もある。入居当初は、管理者と職員がずっとご本人に寄り添い、不安な思いや混乱している気持ちを含めて、行動を見守り続けている。その中で会話を続け、ご本人の歩んでこられた生活や意向などを知る努力をしている。担当職員が中心になり、アセスメントを続けている。		
<b>2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援</b>					
16	29	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は、ご利用者から多くの学びを頂いており、にっこり微笑んで下さる“笑顔”に癒されている。お話をされない方からも、ソファの横に一緒に座っているだけで、職員は包まれている感覚を覚え、時には抱きしめて頂くこともある。「ありがとう」という言葉や、「何かあったら、いつでも言ってね」という言葉を職員にかけて下さることも多く、職員は元気をもらっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
<b>1. 一人ひとりの把握</b>					
17	35	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	施設長は、常に「ご利用者と一緒に」という言葉を職員に伝え続けてきた。一緒に行動し、一緒に家事等を行う中で、職員とご利用者との会話が増えてきており、その中で、意向に触れることができ始めている。まったく発声が無かった方が、声が出るようになり、職員、ご家族の喜びにもなっている。“怒る”という感情に対しても、「何かに腹を立てている」「何に?」と、深く考える習慣もできてきており、その時の“不安”や“混乱”の真意にも目を向け、意向の把握を続けている。		
<b>2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し</b>					
18	38	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	ご利用者やご家族の要望を把握しながら、ご利用者の持っている力・できることを見極め、ご自分でして頂ける環境を作ることを職員も意識してきた。介護計画にも、その自立支援の視点が盛り込まれており、“地域で暮らす”を表現した“外出支援”や、ご家族の役割も盛り込まれた。活動表(3表)に日常生活全般の支援を全て記載し、2表の介護計画には重点内容を明記している。医師の意見も頂き、全職員で話し合いながら、各担当者が介護計画を作成し、計画作成担当者が確認・修正をしている。		
19	39	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	開設時より、ご利用者の介護計画のモニタリングの時期、実際のモニタリングの実施時期、担当者、介護度などが一覧で作成されている。個々のご利用者の心身状況に応じて、モニタリングの時期は設定されており、3か月以内に設定されている方もおられる。毎朝の申し送りの際、全ご利用者の心身状況や変化等の確認も行っている。変化が生じた場合には、状況に応じて随時見直しをしている。全利用者について、ケアの変更の必要性はないか等、月1回のカンファレンスの時に確認を行っている。		
<b>3. 多機能性を活かした柔軟な支援</b>					
20	41	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	ご利用者・ご家族が安心して暮らし続けるために、日々の健康管理や換気などの環境整備を行っている。ご利用者は風邪もひかず元気に生活できている。医師との連携を図っており、病状の早期発見・早期治療に繋げている。入院中も職員はお見舞いに行き、医師との連携で早期退院に繋げることもできている。個別の要望を開き、買い物や外食、デパートへの外出支援を行うなど、柔軟な支援を行っている。		
<b>4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働</b>					
21	45	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人・ご家族の意向を伺っており、以前からのかかりつけ医に受療されている方もおられる。往診体制も整っているが、通院時の介助は主に職員が行っている。ご家族が通院介助をして下さる方もおられ、受診状況の共有もできている。看護師が医師に細かく情報を伝え、医師との十分な信頼関係も築けており、必要時は、適切な医療機関を紹介して下さる等、ご利用者の安心にも繋がっている。法人母体が医療法人であり、相談しやすい関係はできている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
22	49	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	ご利用者やご家族に対して、重度化した時や終末期の対応希望のアンケートを実施している。車いすの方を対応できるのは、構造上3ユニットのみであり、“看取りケア”が行えるユニットとして考えられている。「最期はホームで」と希望されるご家族も多く、ホームとしても、ご希望に沿った対応をしていきたいと考えているが、職員の育成(終末期ケア等)や医療機関との話し合い、法人全体との話し合いは継続中である。	○	前回と同様、日々、職員は、ご利用者が重度化しないような取り組みを続けている。現在は、お元気な方が多い状況ではあるが、ご家族からのホームでの終末期の要望も出ており、今後、施設長としても様々な課題に向き合い、時間をかけながら、方針の確立、医療機関との連携、職員の勉強会等の検討を行っていく予定である。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
23	52	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	法人全体で、接遇研修も行われている。施設長からも常に「利用者の立場だったら？」と言う言葉かけを頂き、職員の意識は確実に変化してきている。ご本人が戸惑うことも想定して、あまり丁寧すぎる言葉使いにはしていない。その中でも、“ご利用者を傷つける言葉を言わない”“年長者としての敬意を持って話す”等の配慮はされている。ご本人の言葉を否定せず受け入れる等、その時その時の、ご利用者の気持ちを考えた行動ができるようになってきている。	○	職員の入れ替わりもあり、今後も引き続き、個人情報保護法の理解や情報の取り扱いに關しての意識付けを行っていく予定である。日頃の言葉かけに対しても、時々、気になる時があり、随時注意を続けている。かなり意識した対応はできているが、今後も、“失禁時などに大きな声になっていないか”“ペースを損ねるような声かけになっていないか”“馴れ合いになっていないか”等、各ユニット毎に、取り組んでいきたいと考えられている。
24	54	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご本人の暮らしぶりを把握できている。ご利用者が主(あるじ)になられており、自主的にお料理や掃除、洗濯物たたみなどの役割分担をしながら、日々過ごされている。長年、家事等をしていなかった方々もおられたが、ホームに慣れてこられるうちに、少しずつ家事に参加される方も増えてきた。職員の離職が続いた頃から、ご利用者のお力が更に発揮され「職員を助ける」と言う思いやりの心から、自主的に動かれる方が増えてきた。職員は感謝の気持ちを伝えている。	○	職員は、意識して、“その人らしい”生活が送れるように努めているが、介護が重なった時等、つい“その方のペースを損ねるような声かけ”をしてしまう事があると感じている。職員の入れ替わりや、勤務体制の改善も含めて、対策は続けているが、現状の中で、いかに“その人らしい”生活が送れる支援ができるのか、全員で検討する予定にされている。
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
25	56	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一部、同施設の配食を利用する等、3つのユニットで異なるが、2年前からホームでも調理をするようになった。ご利用者が主体となり、下ごしらえや盛り付けをしている。自宅では家事をしていなかった方が、他の方が動かれることで、ご自分もされるようになった方もおられ、ご家族も驚かされている。勤務体制の状況もあるが、検食含めて、なるべく職員も一緒に食事をするようにしている。今後も、より楽しい食事の時間となるように、話し合いを続けていく予定である。		
26	59	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	週2回の入浴日以外にも、希望があれば入浴は可能である。健康状態に留意しながら、入浴時間・湯温の希望・順番に応じており、職員との入浴時の会話を楽しむことも多い。羞恥心への配慮もされており、同性介助を行う時もある。拒否がある方は、原因を把握するように努めているが、ご家族が協力して、入浴の支援をして下さる方もおられる。心地よい入浴時間になるように努めている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援</b>					
27	61	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	それぞれ、長年培ってこられた経験があり、職員は、ご利用者1人ひとりの役割作りに努めている。不安や混乱などと向き合いながら、ホームで生活している方々の心理を理解し、少しでも、楽しみや生きがいが持てるように努力をしている。おしゃべり、散歩、買物、プランターの花など、それぞれの楽しみを持って頂き、お花の先生には、お花を生けて頂く場面も作っている。なるべく、ご利用者から「手伝ってあげよう」と言ってく環境が作れるよう、職員も心がけている。		
28	63	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	各ユニットのご利用者によって外出頻度が異なるが、気候が良い時は、平均、週に3~4回は外出している。1階の玄関で日向ぼっこをしたり、近くに散歩に行くこともある。ご希望で、デパートに買い物に出かけたり、お寿司を食べに行くこともあり、なるべく、個別に応じた外出ができるように支援を続けている。遠足の時等は、地域のボランティアの方も参加して下さっている。	○	前回同様、職員は、外出の回数を増やしていきたいと考えている。お弁当を作って、四季折々の花々を楽しめる機会も作っていく予定である。長時間の外出でもあり、企画・準備等、様々な配慮も必要になると思われるが、ご利用者の瞬間瞬間の笑顔が増えていく企画でもあり、実現に向けた取り組みを期待していきたい。
<b>(4) 安心と安全を支える支援</b>					
29	68	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	朝の9時30分から18時まで、玄関の鍵は開けている。1階に事務所があり、事務の方がおられるが、事務の方が席を外す時のみ、防犯の意味もあり鍵をかける時がある。各ユニットの職員は、30分おきにご利用者の所在を確認し、把握できている。		
30	73	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	平成21年は2回訓練をした。7月は職員とご利用者、消防署、12月は職員とご利用者のみで、消防・避難訓練を実施している。夜間を想定して、職員間でのシミュレーションも行っている。災害に備えた備品として、飲料水や食べ物、懐中電灯、毛布、敷物、ラジオ、おむつ等を準備しているが、母体法人からの応援体制もある。	○	現在、地域の協力体制まではできていない。今後、消火器の使い方の訓練の時等は地域の方々にもお知らせし、一緒に参加して頂けるような取り組みも検討されている。今後も引き続き、運営推進会議の議題にも挙げながら、災害時の対策を検討されてみてはどうか。
31	79	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ご利用者それぞれの病状等に応じて、油がダメな方は煮物に変えたり、糖尿病の方はシュガーカットを使用する等、すべて個別に調理をしている。食事量・飲水量ともに、把握し記録に残している。管理栄養士が作成した献立に基づいて調理しており、栄養バランス等にも配慮されている。ホームの食事は「美味しい」と評判であり、ご利用者の方の“元気の秘訣”にもなっている。今後は、検食を行った職員のアンケート結果を、管理栄養士に見て頂くようにしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
32	83	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一階の玄関では、変わらず、魚が泳いでいる水槽等が来訪者を迎えてくれる。エレベータの前には、職員の写真と名前が貼ってあり、エレベーターを待つ間、しばし職員のお顔を拝見することができる。各ユニットも、“日本の家”居間“台所”という空間が作られており、ご利用者が持って来られた「食器棚」や頂き物の年代を感じさせるこたつ等が置かれている。ユニット毎のご利用者の身体状況も考えながら、ホットカーペット、いす、ソファー等、共有空間のレイアウトは変化させている。		
33	85	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご利用者が居心地良く過ごせるよう、自宅で使われていたものは持参して頂いている。身体状況によってベッドや布団も選んで使用しており、ご家族とも話し合いをしている。ご利用者の“アヒル”のぬいぐるみは、今も人気者であり、日によって“アヒル”の過ごす部屋が違っている。慣れ親しんだ大きな鏡や自宅で使っていた椅子等を持参している方もおられる。各部屋、ドアを開けても中が見えにくいように、各自、暖簾をかけているが、和柄が多く、それが全体の雰囲気家庭的な感じにさせてくれている。	○	お部屋の掃除に関しては、ご自分でできる方には任せている状況にある。今後は、職員も一緒に行いながら、整理整頓状況の確認と共に、清潔保持に努めていく予定である。